

# 今昔物語集における「ゝ居ル」「ゝテ居ル」について

高 橋 敬 一

## (一) 「ゝ居ル」と「ゝテ居ル」について

上代から近代までの文献（中央語）におけるアスペクト表現形式の流れを素描したものに柳田征司氏「進行態・既然態表現の変遷―「アル」「イル」「オル」―」（『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院 一九九一年）がある。「キル系表現」（主語は動くもの）を中心に、その変遷を大略すると、

上代（万葉集） ↓ 「ゝキル」（進行態）

中古（源氏物語・枕草子） ↓ 「ゝキル」（進行態）・「ゝテキル」（進行態・既然態）

中世（史記抄・四河入海） ↓ 「ゝテキル」（進行態・既然態）

となり、「ゝテキル」形式が「ゝキル」形式にとってかわるといふアスペクト表現史の大きな流れを読み取ることができる。

また、井上文子氏「「アル」「イル」「オル」によるアスペクト表現の変遷」（『国語学』一七一集 一九九二年）

今昔物語集における「ゝ居ル」「ゝテ居ル」について

は、方言においても文献と同じように、「くて」形によって進行態・已然態が統合されるという現象が見られるという指摘しておられる。

ところで、先の変遷過程の中で、「くキル」と「くテキル」という二形式が、平安時代中期からおおよそ五百年間という長きにわたって併存（特に、「くキル」「くテキル」の進行態の用法）しえているのは、どのような事情に因るのであろうか。あるいは、「くテキル」による統合はどのように進んでいったのであろうか。

因みに、「くキル」形式が、中世後期になって消滅した原因については、柳田氏（前掲書）は、音声上の問題（同一母音の連続）と文法上の問題（補助動詞としての独立性）の二点をあげておられる。

本稿では、「くキル」と「くテキル」が併用されている院政期成立の説話集「今昔物語集」における、このアスペクト表現形式の特色を、それぞれの形式に付く動詞の相違を中心に、平安時代和文資料（代表的な十二文学作品。以下、「和文資料」と略称する<sup>（注一）</sup>）と対照させながら、その特色を考えてみたいと思う。

ところで、以下の論述で「く居ル」・「くテ居ル」とするものは、金水敏氏「上代・中古のキルとヲリ―状態化形式の推移―」（『国語学』一三四集 一九八三年）、迫野虔徳氏「たり」の展開」（『文学研究』八五集 一九八八年）の御指摘にあるように、「ある」のアスペクト形式としては「く居タリ・居給ヘリ」あるいは「くテ居タリ・テ居給ヘリ」の形で出現していると考えられるので、それらを代表させて用いることにする。

また、「今昔物語集」における「居」字の訓の決定は重要な課題であるが、今回は、笠間索引叢刊『今昔物語集文節索引卷一く卷三二』（以下、『索引』と略称する）の訓みに従うこととし、この点についての考察は別の機会に譲ることにする。

ただし、「今昔物語集」において、その活用から判断して明らかかな「をり」の例は、「く居リ」十六例（上接する

動詞は十一語である<sup>(注二)</sup>、「く居り」六例(上接する動詞は六語である<sup>(注三)</sup>)存するのであるが、それらはいずれも「く(テ)居り」十タリ・給へり」形ではないので、アスペクト形式とは認められない。

「今昔物語集」におけるアスペクト形式「く居ル」と「く居ル」の各巻毎の出現状況をまとめるてみると、(表一)のようになる。

(表一)

く居ル	く居ル	
	2	①
	1	②
	3	③
	3	④
	3	⑤
	9	⑥
	1	⑦
	1	⑧
	0	⑨
	4	⑩
	0	⑪
	1	⑫
	2	⑬
	3	⑭
	2	⑮
	8	⑯
	4	⑰
	15	⑱
	6	⑲
	1	⑳
	4	㉑
	4	㉒
	11	㉓
	2	㉔
	15	㉕
	7	㉖
	26	㉗
	7	㉘
	3	㉙
	3	㉚
	10	㉛
くテ居ル	3	
	1	
	3	
	3	
	3	
	1	
	1	
	2	
	8	
	1	
	1	
	3	
	6	
	3	
	9	
	2	
	16	
	10	
	4	
	4	
	10	
	3	
	11	
	16	
	16	
	6	
	3	
	3	

この表から、いわゆる「今昔物語集」の文体と「く居ル」・「く居ル」との関係について考えてみると、まず注目されることは、次の二点である。

その一は、「今昔物語集」内部の文体上の差異と「く居ル」・「く居ル」の使い分けとの間には、はっきりとした相関関係は認められないということである。ただし、「く居ル」と「く居ル」の使い分けと文体との関わりについては、基本的な視点として以下の考察においても取り扱うことにする。

その二は、漢文訓読文的色彩が濃いとされる「今昔物語集」天竺震旦部(巻一～巻十)においても「く(テ)居ル」が用いられているということである。と言うのは、この点に関して、金水氏の報告(前掲論文)「漢文訓読文においては、平安時代を通して依然ヨリが普通に用いられ、反対にキタリ、キタマへりは稀であった。」があるのである。

このことについては、動詞・補助動詞「をり」「ある」の語性の問題を十分検討した上で、改めて「今昔物語集」における「居」字の訓の検討が必要であるので、本稿では取り扱わないことにする。

### (三) 「く居ル」と「くテ居ル」に付く動詞について

「今昔物語集」における「く居ル」と「くテ居ル」に付く動詞を調査してみると、それぞれ次のようになる。(カッコ内の数字の中、二つあるものは上段が「く居ル」、下段が「くテ居ル」の用例数を示す。数字の表示がないものは、用例数が一例であることを示す。)

#### (1) 「今昔物語集」において、「く居ル」にのみ付く動詞例 (三五語)

繚カフ・唄ル・伺フ・詠フ・起ク・置ク恐ヅ・屈マル (十例)・書ク・語ラフ・籠ル (九例)・叫ブ・指シ臨ク・拈ム・沈ム・責ム・聞ク (四例)・答フ (二例)・叫ブ・副フ・叩ク・集フ・列ル・垂ル・泣ク (十六例)・並ム・睡ル (二例)・弾ク・平ガル・平ム・篩フ・モラフ・寄ル・蟠マル・ワナナク・礼ム

#### (2) 「今昔物語集」において、「く居ル」・「くテ居ル」両方に付く動詞例 (二三語)

仰グ・出ツ・云フ (十一例) 1例)・続ム・行ナフ (三例) 2例)・思フ (十七例) 6例)・思ヒ歎ク・下ル・隠ル (八例) 3例)・弘ゴル・ス・留マル・詠ム (三例) 1例)・歎ク・念ズ・上ル・待ツ (四例) 1例)・護ル (三例) 1例)・見ル (十五例) 1例)・向フ (四例) 5例)・息ム (二例) 1例)・行ク・読ム (三例) 1例)

(3) 「今昔物語集」において、「く居ル」にのみ付く動詞例(七四語)

怪ビ思フ・歩ミ寄ル・イララカス・打チ洗フ・打チ合ハス・打チ云フ・打チウナツク・打チ食ヒ畢ツ・打チ随フ・打チ振ル・打チ纏ク・老イ屈マル・抑フ・押シ懸カル・押シ取ル・押シ攤ム・押シ廻ラス・御ハス・思ユ・思ヒ得・思ヒ念ズ・思ヒ乱ル・織ル・懸ク・衛別ク・固ム(二例)・借ル・下ル(二例)・食フ・拳ル・乞ヒ食ラフ・作文ス・差シ宛ツ・差シ去ク・定ム・去ル・騒グ・死ヌ・修ス・誦ス・喬ム・憑ム・緩ム・鎮ズ・着キ並ム・補ル・啼泣ス・解ク・読誦ス・調フ・唱フ(三例)・捕フ・取り直ス・泣キ悲シム・鳴ラス・念ジ入ル・去ク・残り留マル・鉉隠ル・開ル・放ツ(三例)・引フ・跪ク(二例)・悲歎ス・冥グ・参ル(二例)・参り着ク・持成ス・物忌ス・物語ス・物縫ス・宿ス・居去ク・礼ミ入ル

以上、「今昔物語集」における「く居ル」と「く居ル」のそれぞれに付く動詞を検討してみると、いくつかの特色が見られるようである。

その一は、「く居ル」に付く動詞が九七語であるのに対して、「く居ル」に付く動詞は五八語と少なく、その割合は約一・七倍である。これは、たとえば「源氏物語」で「く居る」に付く動詞が四四語に対して、「く居る」に付く動詞は七十語で、「く居る」に付く動詞の方が圧倒的に多いという事象とは異なる。<sup>(注四)</sup>他の「和文資料」を調査した結果も、用例数があまり多くはないので断定はできないが、ほぼ同様の傾向を示すようである。また、「今昔物語集」よりも後の成立である「宇治拾遺物語」においても「く居る」に付く動詞は四五語、「く居る」に付く動詞は三九語で、ほぼ同数(その割合は約一・一倍である)<sup>(注五)</sup>であり、「今昔物語集」におけるアスペクト表現形式の「く居ル」から「く居ル」への移行・交替という特色が窺われる。

その二は、「くテ居ル」に付く動詞の中、「くテ居ル」にのみ付く動詞（七四語）の特徴として、漢語サ変動詞（一部）のサ変動詞を含む）が多いことが揚げられる。「思ヒ念ズ」、「作文ス」、「修ス」、「誦ス」、「鎮ズ」、「啼泣ス」、「誦ス」、「悲歎ス」、「物忌ス」、「物語ス」、「物縫ス」、「宿ス」などである。これらの動詞は、状態性を表わすという共通の性質を有しているので、「漢語サ変動詞＋テ居ル」は「進行態」表現のアスペクト形式ということになる。「くテ居ル」形式の「進行態」表現への進出が窺われる。ただし、「くテ居ル」には他に、瞬間動詞「死ヌ」に付いた例あるいは存在動詞「御ハス」に付いた例などがあり、「今昔物語集」においても「くテ居ル」形式の基本的な性格は「已然態」表現形式であると思われる。

その三は、「くテ居ル」に付く動詞の中、「くテ居ル」にのみ付く動詞の特徴として、複合動詞が多いことが揚げられる。「くテ居ル」にのみ付く動詞七四語の中、三四語が複合動詞（「接頭語＋動詞」例を含む）である。この傾向は、「源氏物語」をはじめとする「和文資料」においても共通に認められるようであり、「宇治拾遺物語」においても同様である。このことは、アスペクト表現形式「くてゐる」の形成を考える一つのヒントを与えているように思う。つまり、「くゐる」形式そのものが複合動詞であるという意識のもとで、更にこれらの動詞に「ゐる」を直接付けることには抵抗感が生じるであろうと思われる。そこで、このような場合には「て」を介して表現するという表現法が発生し、漸次、この表現形式がアスペクト表現形式「くてゐる」として定着していったのではないだろうか。

その四は、「く居ル」に付く動詞の中、用例数の多いものを上位から順に揚げると、「思フ」（十七例）、「泣く」（十六例）、「見ル」（十五例）、「云フ」（十一例）という順になる。これらの動詞は、人間の心理的活動を表わす動詞であり、これらに付いている「く居ル」形式は「進行態」表現であると考えられる。ところが、「くテ居ル」には、こ

これらの動詞に付いた例も存するのであるが、その数は「く居ル」に較べるとはるかに少ない。「今昔物語集」においては、未だ「進行態」表現の中心は「く居ル」形式であると言わなければならない。しかしながら、ここで、注目しなければならないことは、「和文資料」では、ほとんど用例を見ることができなかつたところの、これらの動詞に付いて「進行態」を表わす例が「今昔物語集」で急激に増加しているということである。これに関しては後述する。尚、先に述べたように、「くてゐる」に付く動詞が「くゐる」に付く動詞の数をわずかではあるが上回る「宇治拾遺物語」においても、「進行態」表現の中心は未だ「くゐる」形式のままの状態であるようだ。

### (三) 「今昔物語集」における「くて居ル」の増加について

「今昔物語集」において、「テ」を介する表現形式が急激に増加していることについての考察をしてみたい。方法は、「今昔物語集」における「くて居ル」の上接動詞一覧を作成し、それらと「今昔物語集」成立以前の「和文資料」と比較対照し、検討することにする。併せて、増加の要因等についても考えてみたい。

次の(表二)は、「今昔物語集」と「和文資料」各作品におけるアスペクト表現形式「くゐる」および「くてゐる」に付いている動詞の異なり語数をまとめたものである。

尚、表中の「比率」あるいは「一致率」とあるのは、それぞれ各作品ごとの「くゐる」・「くてゐる」の用例数全体に対する「くてゐる」の占める割合を「比率」とし、「くゐる」および「くてゐる」の上接動詞の中、両方に付いている(一致している)動詞の「くゐる」上接動詞に占める割合を示したものを「一致率」とする。尚、カッコ内

の数字は用例数を示す。

(表二)

一致率	比率	「く居る」		
		「く居る」	「く居る」	
0	0.7	2	3	竹 取
0	0	0	0	伊 勢
0	0	0	0	土 佐
0	0.6	4	7	蜻 蛉
0	1.6	28	17	宇 津
0.3 (1)	5.0	20	4	落 窪
0.1 (1)	0.9	16	18	枕 草
0.1 (8)	0.8	45	56	源 氏
・	・	3	0	和 泉
0	0.4	7	18	夜 寝
0	0.2	1	5	大 鏡
0.3 (1)	1.7	5	3	堤 中
0.4 (23)	1.7	97	58	今 昔

この表の「比率」をみると、「落窪物語」のように数値の高いものもあるが、それを除くと「今昔物語集」が他の作品と比較してわずかではあるが「比率」の数値が高いことがわかる。また「一致率」の方も他の作品に較べて数値がわずかではあるが高い。これらのことは、「今昔物語集」において「くテ居ル」形式が従来の「く居る」形式の領域へと勢力を伸張していることを示しているものである。特に「源氏物語」との比較をしてみると、「比率」において約二倍、「一致率」において約四倍になっていることは注目される。

また、「和文資料」における「く居る」および「く居る」の上接動詞の「比率」、「一致率」は用例数が少ないために生じたと考えられる一部の高い数値を除くと全体に低いことがわかる。これは、「和文資料」においては「く居る」および「く居る」の上接動詞に、相違があったことを推測させるものであり注目される。



次の(表三)は、「今昔物語集」において、「く居ル」・「くテ居ル」両方に付いている動詞(二三語)の中、「和文資料」において「くゝゐる」または「くゝてゐる」のどちらかに付いている例が存するかどうかを調査したものである。ただし、「和文資料」の場合の「くゝゐる」の用例の中には、アスペクト表現形式以外のもの、つまり後項に「ゐる」を要素として持つ複合動詞「くゝゐる」を含めて調査をした。これは、「今昔物語集」で「くゝテ居ル」形式が勢力を伸ばしつつあることを実証するためである。以上のような動詞は二三語中一六語あり、それらをまとめたものである。

また(表四)は、「くゝテ居ル」にのみ付いている動詞(七四語)の中、「和文資料」においても例が存するかどうかを調査したものである。「和文資料」の用例には、同じく複合動詞を含めているのであるが、動詞の一致するものは僅かに十一語に過ぎない。それらをまとめたものである。

尚、表中の記号を説明すると、◎は「くゝてゐる」形が存すること、○は「くゝゐる」形(複合動詞を含む)が存すること、●は「くゝゐる」・「くゝてゐる」両形が存することを示している。

今昔物語集における「く居ル」「くテ居ル」について

(表三)

動詞											作品						
讀ム	向フ (五例)	見ル	護ル	待ツ	上ル (二例)	念ズ (二例)	歎ク	詠ム	ス (十四例)	隠ル (三例)	下ル	思フ (六例)	云フ	出ツ	仰グ		
					○								○	○		竹	取
					○					○	○	○				伊	勢
											○					土	佐
	○		○							○	○					蜻	蛉
	●	●		○				○	●	○			◎	◎		宇	津
	○							◎	◎	○		○	●	○		落	窪
○		●	○		○			○	◎			○	○	○		枕	草
○	●	●	○	○	○	○	○	●	◎	●	○	●	○	○	○	源	氏
														○		和	泉
		○	○									○		○		夜	寝
	○			○									○	○		大	鏡
											○					堤	中
			○									○	○			今	昔

(表四)

動詞 作品																							
竹 取 伊 勢 土 佐 蜻 蛉 宇 津 落 窪 枕 草 源 氏 和 泉 夜 寢 大 鏡 堤 中 今 昔	<table border="1"> <tr> <td>抱ク</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>打ち詠ム</td> <td></td> </tr> <tr> <td>畏マル</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>返ル</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>着ル</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>着ク</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>作ル (二例)</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>並ブ</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>腹立ツ</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>申ス</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>見遣ル</td> <td>◎</td> </tr> </table>	抱ク	◎	打ち詠ム		畏マル	●	返ル	○	着ル	◎	着ク	○	作ル (二例)	●	並ブ	○	腹立ツ	○	申ス	○	見遣ル	◎
抱ク	◎																						
打ち詠ム																							
畏マル	●																						
返ル	○																						
着ル	◎																						
着ク	○																						
作ル (二例)	●																						
並ブ	○																						
腹立ツ	○																						
申ス	○																						
見遣ル	◎																						

以上、(表三) (表四) から、「今昔物語集」における「くテ居ル」の特色として、次のようなことが考えられる。「今昔物語集」と「和文資料」を比較してみると、勿論、「和文資料」の中にも、すでに「くてゐる」形式が存在しているのであるが、その数は「今昔物語集」に較べると遙かに少なく、しかも、「和文資料」では「くるる」にの

今昔物語集における「く居ル」「くテ居ル」について

今昔物語集における「く居ル」「くテ居ル」について

み付いていた動詞が、「今昔物語集」になると「くテ居ル」にも付くようになったという例が多く見出だされるようになるということである。そのような動詞を（表三）（表四）から抜き出して、次に示す。

「仰グ」 或ハ、……空ヲ仰テ居タリ（十・三二）

「下ル」 晴澄、馬ヨリ下テ居タルヲ（二九・二二）

「返ル」 玄渚、此レヲ見テ本ノ房ニ返テ居タルニ（七・三三）

「着ク」 守、其ノ饗ニ着テ居タリケルニ（二八・三九）

「歎ク」 母、……不飲食ズシテ歎テ居タリ（九・二）

「並ブ」 （鴨雌）命ヲ不惜ズシテ夫ト並テ居タリ（一九・六）

「念ズ」 僧、……物恐シク思ヘドモ、念ジテ居タル程ニ夜明ヌ（一九・一二）

（僧）「只仏助ケ給ヘ」ト念ジテ居タル程ニ（二六・八）

「上ル」 （男）恐々ツ上テ居タレバ（一六・一五）

三人乍ラ板敷ノ上ニ昇テ居タレバ（三二・一四）

「腹立ツ」（犬）此ノ鉢ノ物ヲ不食デ腹立テ居タルヲ（三・二十）

「申ス」 男、……昔ノ事ナド申シテ居タル程ニ（一六・一八）

「待ツ」 獵師、……今ヤ今ヤト待テ居タルニ（二十・一三）

「護ル」 清廉、……只守ノ顔ヲ護テ居タリ（二八・三一）

「見ル」 獵師、奇異也ト見テ居タル間ニ（十・三八）

これらの動詞は、「今昔物語集」において、はじめて「〜テ居ル」と結合してアスペクト表現形式を形作っているということになる。しかも、これらの多くが、「歎ク」、「念ズ」、「腹立ツ」、「申ス」、「見ル」、「読ム」など（人の）心理的活動を表わす動詞、あるいは「仰グ」、「待ツ」、「護ル」など（人の）状態を表わす動詞であり、「〜テ居ル」と結合して、いわゆる「進行態」を表わしているのである。このように、「今昔物語集」における「〜テ居ル」形式の勢力拡大は、「〜テ居ル」形式が「既然態」表現から「進行態」表現へと用法を拡げていったことによるものであった。

#### （四） まとめ

アスペクト表現形式「〜居ル」を駆逐しながら、次第に「〜テ居ル」が勢力を拡大していくというアスペクト表現の大きな流れの中で、「今昔物語集」がどのような位置を占めるのかということテーマに考察した。些かの結論をまとめると次のようになる。

「今昔物語集」におけるアスペクト表現形式としては、「〜居ル」「〜テ居ル」両形式が存する。両形式は「〜居ル」が「進行態」表現、「〜テ居ル」が「既然態・進行態」表現と用法を分担しながらも、他の平安時代和文資料と比較すると、「〜テ居ル」の「進行態」表現の用法がかなり拡大したものである。それでは、どのような要因で「〜テ居ル」が「進行態」表現に進出していったのかというと、「今昔物語集」などの説話で多用されるところの「漢語サ変

今昔物語集における「く居ル」「くテ居ル」について

動詞、「複合動詞」、「心理的活動を表わす動詞」などに付いて「進行態」を表わすようになったことが、「くテ居ル」形式の増加の大きな要因であると考えられる。以上のようなことである。

(注一) 取り上げる十二作品は、次の通りである。また、用例の調査は刊行されている索引類で行なうが、詳細は略させて頂く。

竹取物語・伊勢物語・土佐日記・蜻蛉日記・宇津保物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・夜の寝覚・大鏡・堤中納言物語

(注二) 上接動詞を掲げると、次の通りである。

「祈ル」(二八④)、「云フ」(二八①⑦・三〇⑤)、「屈ル」(十四②・十九⑫・二十②・二三⑬)、「隠ル」(二十②)、「語ル」(二三⑤⑤)、「食フ」(三〇⑤)、「泣ク」(二十二②)、「平ル」(二九⑩)、「振フ」(十六⑱)、「耄ク」(二九④)、「向フ」(二九⑫)以上十一語十六例

(注三) 上接動詞を掲げると、次の通りである。

「抱ク」(二九⑮)、「去ル」(十三②)、「敷ク」(二八⑭)、「ス」(二八⑭)、「付ク」(四⑪)、「向フ」(十七⑬)以上六語六例  
柳田征司氏『室町時代語資料による基本語詞の研究』(武蔵野書院 一九九一)中の資料による。

(注四) 拙稿『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「くゝある」「くゝてゝある」について(『活水論文集』三六集 一九九三・三)